

「心の飢餓を癒す？甘麦大棗湯」(Ⅲ)

－その有効性の本質を考える－



左から 田中・橋口（亮）・中川・橋口（玲子）・奥村 の五氏

症例3 不安神経症に甘麦大棗湯・六君子湯

田中 不安神経症に甘麦大棗湯と六君子湯を併せて有効であった方ですが、48歳の女性で、主訴はストレス時の呼吸困難感、動悸です。9月、突発的に呼吸困難感、動悸が出現し、腹痛、下痢を伴っています。10日後も同症状が出現し、救急外来を受診するも器質的疾患は否定的でした。早朝時の腹痛、就寝時に症状再発への不安、動悸が継続し、東洋医学的治療の検討のために紹介受診となった方です。既往歴は10歳で扁桃摘出術を行っています。145cm、47kgで、検査結果で、血算、生化学、甲状腺機能等、特記すべき所見はありませんでした。

東洋医学的診察で寒熱では、手足が冷える、かぜを引きやすく、冬季に咽頭痛で発症することが多い。汗はかかないほうである。もともと胃弱で、下痢傾向であり、空腹感はあるが、食事中に動悸があり食欲低下となってしまう。疲れやすく、肩こりは疲労で増悪する、慢性頭痛

奥村 克行先生

(五反田駅前メンタルクリニック院長)

田中耕一郎先生

(東邦大学医学部東洋医学研究室)

橋口 玲子先生

(緑蔭診療所(小児科・循環器科))〈司会〉

橋口 亮先生

(緑蔭診療所、東邦大学医学部東洋医学研究室

(婦人科))〈世話人代表〉

中川 良隆先生

(中川内科医院院長)

〈コメンテーター〉

もあります。月経は順で、脈は沈細です。舌質は軽度紅色で、白膩苔、舌下静脈の怒張があります。診察時に手指の軽度の震えがありました。

最初に四逆散、六君子湯を1日3回と、桂枝加竜骨牡蛎湯を眠前に服用としました。これによって下痢、腹痛は改善しましたが、ご本人の印象として桂枝加竜骨牡蛎湯が強すぎるという

ことで、眠前はそれをやめて、他医の処方クロチアゼパムのみとしています。以後、五積散、六君子湯を用いることで安定して、2ヵ月後にクロチアゼパムも不要となりました。睡眠時の動悸、不安時には甘麦大棗湯を処方して症状は安定しています。

東洋医学的考察ですが、この方は体質的には脾虚です。その方が不安、動悸を生じているわけで、肝脾不和といわれる状態と考えました。症状の急性期以降は健脾祛湿を考え、六君子湯で全身状態をよくし、夜中の動悸、不安時には甘麦大棗湯で心の気血を補って心を強めるという治療で安定しました。この方は背景に、お父さん、お母さんの介護、子供の進学など、家庭のいろんな問題を一手に引き受けて、五臓でいう心にかかなり負担がかかっていたと考えました。そういったなかで、甘麦大棗湯を加えたことで、心の気血を強めることができたのではないかと考えました。

橋口(玲) ありがとうございます。この方は、夜間に不安の発作で目が覚めてそこで頓用するのではなくて、就寝時に動悸があったりして不安があると、眠る前に甘麦大棗湯を飲んでいらっしやるのですね。

田中 すでに症状のあるときにも使われること

はあるのですが、何となく不安で落ち着かないときは、眠前だけではなくて、日中に使ったり出かける前に使ったりしています。

橋口(玲) 中川先生はパニック障害に甘麦大棗湯を用いた例も報告されています。先生の「再び甘麦大棗湯について」の症例3(パニック発作と甘麦大棗湯)ですが、不安な状態から、甘麦大棗湯を飲むと生あくびが出て落ち着くので、早くあくびが出ないかなと患者さんが考えるというところがとても印象的でした。躁の条文にも生あくびが出てきます。こういうあくびが出て落ち着くというのも非常に興味深いなと思いました。ほっとしてきたときにも出るのでしょうか。

奥村 六君子湯を使っておられますね。脾の役割があるのでしょうか。過食で甘麦大棗湯を使うことがありますよね。脾胃の熱が食欲亢進につながるという見方があったり、先ほど橋口先生が魂魄をつなぐ、あいまいになったり崩れたものを補うような感じとおっしゃったと思うのですが、脾のほうで何かを補って補修するとか、脾胃の熱を冷ますとか、気を補うとかの働きがかかわっている可能性もあり得るのではないのでしょうか。甘麦大棗湯自体が脾に働く面があるのかなと考えたことがあります。

症例3：不安神経症に対して、甘麦大棗湯と六君子湯を併せて有効であった症例

48歳 女性 X年9月初診

主訴：ストレス時の呼吸困難感、動悸

現病歴：同月、突発的に呼吸困難感、動悸出現し、腹痛、下痢を伴った。10日後にも同症状が出現し、救急外来受診するも器質的疾患否定的であった。早朝時の腹痛、就寝時に症状再発への不安、動悸が継続し、X年9月東洋医学的治療の検討のため、同日当科紹介受診となった。

既往歴：10歳 扁桃摘出術

現症：145cm 47kg

L/D 血算、生化学、甲状腺機能 特記すべき所見なし

東洋医学的診察：寒熱：手足冷える(+)、易感冒、冬季に咽頭痛で発症。発汗：あまりかかない、胃腸：もともと胃弱、下痢傾向、空腹感あるが、食事中に動悸があり、食欲低下となる。易疲労、肩こり(疲労で増悪)、頭痛。

月経：順 沈弦 脈：弦細 舌質：軽度紅色、白膩苔、胖、舌下静脈怒張(+) 診察時、手指に軽度震え。

経過：四逆散3包3Xと六君子湯3包3X、桂枝加竜骨牡蛎湯1包1X 眠前、処方にて下痢、腹痛は改善するも、桂枝加竜骨牡蛎湯は強すぎるとの印象で眠前は他院処方のクロチアゼパムのみとする。以後五積散、六君子湯として安定し、2ヵ月後、クロチアゼパムは不要となった。睡眠時の動悸、不安時には甘麦大棗湯を処方として、症状安定している。

東洋医学的考察：体質脾虚の患者の不安、動悸は、肝脾不和の状態と考えられた。症状の急性期以降は健脾祛湿で状態は良く、夜間の動悸、不安には甘麦大棗湯で心の気血を補い、“心を強める”ことで安定した。背景に父母の介護、子供の進学などの問題を一手に引き受けており、気虚が進んだ事が原因と考えられた。

橋口（玲） 甘麦大棗湯を補脾剤ととらえる見方はいかがですか。

中川 私は基本的にはそのようにとらえていますね。胃腸の丈夫な人とかではなくて、やはりもともと脾胃が弱くて、何か弱々しい感じのする人というのを、イメージとしてはいちばん重要視します。

橋口（玲） そういう方の弱々しさを改善していくのに、甘麦大棗湯を続けて飲むよりは、別の補剤を飲んでいただくというほうが本質的な改善につながるとお考えでしょうか。

中川 ケースバイケースではないでしょうか。この場合は六君子湯が合う部分強いから、六君子湯で基本的なことをしておいて、それだけでとりきれない不安感に甘麦大棗湯を頓服的に与えていらっしゃるのですが、私もよくそういうやり方をしています。甘麦大棗湯だけで、いわゆる脾胃を強めるとか、六君子湯や補中益気湯などの代わりはちょっとできないような感じはもっています。

田中 何かがぐらつくときに安定感をもっとつくるといような感じ。この方はいろんな責任を自分で抱えていると、胸のあたりにざわつきをいつも感じているのです。何かをしなくてはいけないうきに、それが激しい不安感に変わるというのがあるのですね。そのときに甘麦大棗

湯を使ってあげるとそれが鎮まっていくという感じで、通常は補気をしておくとそれに余裕が生まれるという感じですね。

橋口（玲） ありがとうございます。

次に私の症例を呈示したいと思います。

（次回へ続く）

